

兵器、弾薬を並べた。

十一時五十分旅団長杉野少将到着、一万三千人の将兵が居並ぶ前を蒼白なおもちで入場、最後の別れの闊兵をおこなった。引き続き杉野少将の指揮ではるかに皇居を拝し、君が代を奉唱、つづいて訓示がおこなわれた。これがソ連軍南下を阻止し占守島防衛の重任を果たした日本軍最後の瞬間であった。

ソ連軍師団長グネチコ少将はジープで入場、これを迎える杉野旅団長に握手する姿をみて、われら日本軍将兵は戦闘に勝ちながら敗者に武装解除を受ける皮肉な事実之感無量で言葉はなかった。かくて一時間にわたる武装解除も終わり、各部隊はそれぞれの宿营地に引き揚げた。

武装解除された私達はソ連側の指示によって部隊を解散、逐次各地に集結させられ作業大隊が編成された。大隊は准尉を長とする四個中隊（一個中隊二百五十人）編成の約一千人とされ、各隊将校のみの将大隊も編成された。

作業大隊は九、十月は島内のソ連軍兵舎の設営や道路

構築などを続けた。十一月より逐次シベリヤ方面へ大隊単位で輸送された。

私たちの大隊も十一月二十七日ソ連船「スターリングラード号」という貨物船に乗船、ナオトカ港に入港した。これが二年半にわたる収容所生活の始まりである。

私の軍隊生活の思い出より

東京都 後藤 三雄

私は自分の軍隊生活をみて、当時大日本帝国の忠勇な軍人であったかと考えるとまったくそんな自信がない。

まじめに任務は果たさなければならぬとは思っていたが、国家の大事を自覚しいちずに軍務に精励するほどでもなかった。体罰などをなるべく受けたくないよう、古参兵、上等兵などの多少の無理難題は「無理が通れば道理が引っこむ」とさからわぬよう、いわれるままに振るまい、立ちまわっていたに過ぎない。

しかし僅か二年半ばかりの期間のことだが、その記憶

は鮮烈に残っている。学校生活、四十年余りの長いサラリーマン生活、その記憶はぼうぼうとして取りとめもなく、個々の出来事を断片的に覚えているに過ぎない。軍隊の二年半だけが区切られて記憶が鮮明なのはなぜだろう。

私は日記を書く習慣をもたない。老年になってすべての記憶を失い恍惚の人になる前にこれを書いてみようと言を取った。

—東京空襲—

サイパン島が玉砕してから、しばしば東京が空襲されるようになった。敵機B 29はサイパンを基地として飛び立つと、硫黄島上空をへて伊豆下田の日本軍電波探知機の電波を逆探知して目標として北上し、下田からは富士山頂へ行って方向返還し東京へ向かう。

爆弾投下、空襲をしたのち、銃子へ抜け、サイパンへ掃投するのが常用のコースになっているようだ。

われわれのいた千葉稲毛の高射学校は東京空襲後銃子へ向かうコースの真下にあることになる。学校では七センチ高射砲陣地をつくり、いつでも射撃出来るようにし

ていた。しかしB 29は高度一万二千メートル、そして高空の偏西風に乗って飛行するので航速が百二十メートル（時速約四百五十キロ）とても我々の高射砲では射撃できる目標ではなかった。ちなみに七センチ高射砲は高度六、七千メートルまで、航速は八十メートルぐらいの目標を射撃するよう訓練するのが常だった。弾丸の到達高度も九千メートルが精一杯だったとおもう。

ある日のこと、例によってB 29の編隊が学校の上空に進んできた。射撃出来る条件ではないので手をこまねいてみていたら、高高度を飛行するB 29は迷彩塗装するより金属色のままの方が視認発見されにくいとかで銀色のままだった。それがときどき夕日に照らされてキラキラと光り、みていた区隊付少尉の一人が「きれいだなあ」と思わずひとりごとのように声をもらした。運悪くすぐうしろに幹候隊長が立っておられたのでこれが耳にはいり大目玉となった。

—連隊の見習士官—

幹部候補生はあるときは将校生徒とおだてられながら、常日頃は修行中の身と行動の制約を受ける。ようや

く見習士官になっても、将校からは見習中と軽く扱われたのだ。それでも食事は将校集会所ですることになっていた。集会所一番奥のテーブルの中央に連隊長、その両翼に大隊長、中隊長方がつかれる。縦の四列のテーブルの奥のほうから古參の隊付将校、入り口に近い末席に見習士官連中が着席する。昼食時は見習士官三人ずつが交たいで、連隊長の向かい側に着席させられることになっていた。

見習士官連中は相変わらず腹をすかせていた。将校集会所で食事をすると、上席の方には汁のなかに具もたつぷりはいつているが、末席の見習士官のところでは汁ばかりで中身はわずかだった。ときどき汁粉のでることがあったが、そんなときでも見習士官の席ではあずきの粒は少ししかはいつていなかった。なにか理由をつくって中隊の将校室で当番兵にたのんで食事を持ってきてもらうと、中隊の兵隊達のぶんからたつぷりと取りわけてもって来てくれる。時々これをやったが中隊長に知れて叱られたことがあった。

— 仙酔島陣地 —

鞆の仙酔島に高射砲陣地をつくり、瀬戸内海で鞆港に避難してくる船舶の援護をすることになった。中隊内で要地高射砲陣地を知っているのは自分だけだったので、陣地構築を命じられた。

国立公園内のとくに名勝の地、本来ならば松の枝を折ることも許されない筈だが、太い松の木を惜し気もなく切り倒し掩体の枠組みに使い、ダイナマイトを使って岩をくだいて壕を掘り、高射砲四門、測高機、航速測定機、等掩体陣地をつくった。設置する高射砲は野戦高射砲の脚がなく、船載用の橋礎をつけるので深く掘らなければならず水準を出すのに苦労したものだ。

— 吉備津丸乗船 —

第三中隊に乗船命令がでた。翌朝、中隊長からお前は留守中隊の連絡責任者として残留せよと申し渡された。中隊長以下皆一緒に乗船したいとのんだが駄目だった。ほとんどのものが連隊長に乗船の申告をするために出ていつてしまった。残ったのは中隊事務室に四、五人、自分は将校室でひとりふてくされていたら伝令がとんできて、船橋の将校に一人の欠

員がある。すぐ支度をして申告に整列せよとのこと、大急ぎでとびだして行って中隊員と一緒に連隊長に申告した。連隊長に見送られ衛兵が整列しラッパを吹奏して敬礼してくれる前を隊伍をととのえて衛門を出るときは、いささか悲壮な感じで身の引きしまる思いだった。

乗船する「吉備津丸」はマニラで空襲を受けて船首を損傷して帰り、兵庫の三菱造船所で修理をしていた。この船は高射学校へ入校のためフィリピンから内地に帰る時、マニラから便乗したことのある私には因縁浅からぬ船だった。

戦局はだんだん悪くなり、日本陸軍の大型輸送船としてはゆいいつ最後のものになっていた。艦装はまるで軍艦のようだった。船首と船尾に七センチ高射砲各四門の二個中隊、甲板中央両舷に野砲各一門、二十五ミリ双連機関砲四基、擲弾筒のような打ち上げ阻塞筒二十基、船尾に爆雷投下機二基、そして当時としては最新鋭の海上電波探査機（たせ号）、水中音波探査機（す号）も装備されていた。

船首高射砲四門が中隊長篠原中尉、第一小隊長豊田見

習士官、第二小隊長田口見習士官、指揮小隊長鈴木少尉、弾列土器屋見習士官だった。船砲隊長および船尾高射砲中隊、野砲、機関砲は船舶砲兵第二連隊から、探査機は船舶情報連隊から乗船していた。

私は船橋のうえで船砲隊長のもとで、指揮班長として三メートル測高機、航速測定機、船尾の爆雷小隊及び各隊から船橋に出された通信班を掌握することになった。部署が船橋になったので、居室は船橋操舵室下の乗船舶隊の佐官級の将校が二人はいる部屋を見習士官の分際で使わせてもらうことになった。お陰で起居はゆっくりとして快適だった。

— 船上の演習訓練 —

「吉備津丸」船砲隊は混成の部隊なので、船砲隊長指揮の全船統一の戦闘訓練、船首、船尾、右舷左舷区分としての各個の射撃訓練、潜水艦に対する爆雷投射訓練などもおこなわれた。

ある日、船砲隊長から爆雷投射盤の作成を命ぜられた。私は爆雷の実物を見るのはこの船に乗ってはじめであり、爆雷投射盤に関しての知識はかいむである。し

かし、命ぜられたからにはやらざるまいとなし、智恵をしぼった。まず板上に同心円をえがき、一等航海士から借りてきた本船の試運転時の航跡図をかき、作図し、透明定規に本船の全速航走の速度を秒時に換算して目盛りをきざみ、別の一本の定規に潜水艦の潜水航速を同じく秒時換算したものをきざんだ。

対潜爆雷戦闘をする場合、潜航している潜水艦の方位距離は「す号」が測定して報告してくるが、爆雷を投下すると爆発の衝撃で「す号」の架台を損傷するので投下の三分前に計測を中止して架台をあげねばならない。その後の潜水艦の未來位置上に本船を誘導し、爆雷投下分時を算定するのが爆雷投射盤なのである。一応それらしきものをつくりあげ、少なくとも私の頭のなかだけではこれで命中するはずだった。

当時の潜水艦はディーゼル機関で推進するが、潜航すると蓄電池で進むので速度は海上の半分以下になるのが常識だった。また船はおもかじをとると、船体がいったん左へ寄り、船尾をふってから船首を右へ向け旋回すること、取りかじをとるとその反対、一軸推進の船ではお

もかじ取りかじで旋回半径がそれぞれで相違することをそのときはじめて知った。

— 出港 —

船体の修理を終わり、本船は本土決戦のさいの兵員輸送にそなえ、比較的安全と思われる日本海側に回航して温存をはかるとのことので兵庫港を出港した。

当時は大阪湾内といえども自由に航行することはできず、大阪湾と神戸港からの水路が湾中央のP点で合流して外洋へむかうY字形の二十五メートル幅の掃海水路が設定されている。しかし、出港して微速でいくうち、一時間もたたないのに推進軸の軸受けが加熱するので再び修理のため引き返すことになった。途中で引き返そうにも掃海水路の幅がせまく、船体が大いので旋回出来ず、P点までいって前進後退を何度も繰り返してようやく向きをかえて兵庫港へもどった。

— 阪神地帯の空襲 —

外出を許され母が罹災してから身を寄せている額田の親戚へ行った。夕刻帰船すべく梅田駅まで来たとき空襲警報が鳴った。阪急駅の地下へ避難した。しばらくする

と爆弾の破裂音、対空砲火の音などが地下へも聞こえて

きた。なんとしても就寝消灯時までには帰船したいのだがなかなか解除にならない。なんとか地上に出て様子をみに行つたが、変に動きまわつて私用外出中に怪我をしたとあつては困るとやきもきしながらもじつと我慢をして

まつた。
数時間してようやく解除になつたので地上に出てみると西のほうの空が大火災で赤くなつていゝのがみえた。

阪神線、阪急線、国鉄線共に神戸方面へ行くのは不通になつていた。何とか神戸に帰りたいと駅で憲兵をつかまえて事情を話して神戸方面への便を探してくれと頼んだが、尼崎、灘方面、全面敵に空襲で国道線の車両もまったく通行が不可能とのこと、しかたなく地下にもどつて夜の明けるのをまつた。

早朝になつて、阪急宝塚線が動くとのこと、宝塚へゆき、宝塚から有馬へ、有馬から有馬電鉄で神戸へでて、中隊長にお詫びと報告に行くと「お前のことだからなんとしてでも帰るだろうとたいして心配はしなかつた」と笑つていわれたのでほつとした。

—空襲—

岸壁をはなれて湾内のブイに係留しているときだつた。ある日、空襲警報が鳴つた。

「総員定位置につけ」

の号令で全員が部署に急いだ。私も船橋上にかげのぼり船砲隊長のそばに立つた。大阪上空に敵機が侵入したらしい、大阪上空に対空砲火の爆煙がみえる。ラジオが

「敵艦載機数機が大阪上空を旋回中」

といつてゐる。双眼鏡でみると機影がみえた。しかし形がおかしい、機が横を向いたとき胴体に日の丸がみえた。

「あれ友軍機じゃないですか」

「そうらしいな」

「迎撃戦闘機もあがつてゐるらしい」

なお大阪上空を双眼鏡でみていた。そのうち二機が海岸線ぞいに低空でこちらに向いてやつてくる。船首砲隊が「目標」と号令がかかり砲身をまわして照準したのがみえた。

三百メートルほどはなれて停泊していた海軍の掃海艇

がダダと機関銃を一群射したとおもったら、我々の船橋よりまだ低い海面すれの超低空を敵機が、そのすぐうしろ距離にして三、四十メートルもあると思うほど接近追尾して友軍機が通り過ぎた。あっと思う間の出来事だった。しばらくして友軍機が引きかえしてきてわれわれの上空を翼をふりながら大阪の方へ帰っていった。敵機をげきついで来たのだろうか、もし船首砲隊が信管射撃でもしていたら友軍機もろともに撃ったところだった。

またある日、空襲警報の出たときだった。全員部署につき厳重な監視をしていたら、B 29が一機大阪方面から海岸線沿いにこちらに向かってきた。高射砲は目標を捕捉し照準をしていたが七センチ高射砲で射撃するには目標の高度が高すぎた。私は双眼鏡で目標を追っていた。神戸上空に近付いたとき、胴体下側の扉を開いた。

「爆弾を投下するぞ」

黒点が胴体から出てはなれ、放物線をえがいてこちらに落ちて来る。本船に命中するか、すこしそれた。目で爆弾を追ってうしろへ振り向き膝をついたとき、ドカー

ンと大きな爆発音とともに火柱と爆煙が高く吹きあがり、造船所構内に命中した。

停泊中の入浴は造船所の風呂を借りていたので、夕刻上陸して通りかかると爆弾の落ちたところは、一棟の工場が原形をとどめず破壊され、大きな摺鉢状の穴があいていた。

—最後の出港、沈没—

修理が終わり再び出港することになった。南方へ石油を取りに行ったタンカー船団がほとんど撃沈されてしまふ最悪の戦況になっており、大型船の燃料補給はなかなか困難だった。小型タンカーが二隻本船にせつげんし燃料の積みこみを始めた。重油はなく松根油だとのことだった。勤労働員の人たちが苦勞しても、ごくわずかつしかとれない貴重な松根油をこんなにたいて走るのか、もったいないようなきがした。しかしそれでも燃料は足りず由良から伊勢湾四日市に寄港、そこでまた燃料補給をする必要があるのだとのことだった。本船は貴重な最後に残った大型輸送船だ、慎重に航行しなければならぬ。潜水艦情報を地図上でみると紀州沖は勿論、由

良から内側にまでマークがついている状況だった。船長は紀伊半島をまわるときは大島の内側を通って行きます。あのせまい水路をこの大型船を操船航行出来るのは自分のほかにはいないだろうと豪語していた。

出港にさいして、甲子園の船舶情報連隊から浮遊機雷探査機を装備した大発艇二隻が来援し、本船の二千メートル前方を五十メートルの距離をとって先導してくれることになった。出港当日、私は日直士官だった。半数の者が対空対潜の監視につきながら出港した。

突堤を出るとすぐ西進、大発艇先導で本船は微速で進んだ。垂水沖の海上灯台の手前二千メートルで転舵P点を通って由良へ向かうはずだった。

私は十二時から監視係将校として勤務につくことになっていったが、食事直後に勤務につくよりも勤務下番してからゆっくり食事をしようと思い、船橋のうえで監視係将校のうしろに立って、子供の頃の学校の遠足などで行った須磨、舞子の海岸を「もうこれで見おさめかな」などと思いつながら、周囲の景色にみとれていた。

しばらくして、下の操舵室のオフィサーから灯台まで

の距離を測定してくれ、といってきたので、私はすぐに船首観測に命じて灯台までの距離を測定させ、電話で刻々報告してくるのを操舵室へ連絡通報していた。

二千三百メートルぐらいになった時だった。転舵点に近づき速度を落として本船との距離のつまっていた大発艇が、赤旗の停船信号をあげた。すぐまた手旗信号で

「スグソノバデカイトウセヨ」
と送って来た。操舵室にそのままたえたがすぐには停船できず、海峡の速い潮流に流された。

「ドカン」

と大首響と共に船は地震のように振動し、左舵船首近くにデレッキ門柱より高い水柱が高くあがった。船は徐々に傾き甲板に立っていられなくなった。私はまわりの掩体手すりにまたがって、近くの兵隊には手摺りにつかまって横になつていよう指示した。二、三番ハッチの隔壁付近に浮遊機雷があたり、破口が大きく本船の構造上通し甲板となっているため、防水は不可能との連絡があった。

船砲隊長は「退船甲」を下令されたが、操舵室からす

ぐまた連絡があり、「本船を陸地に向けて擱座させる、水没はしない」とのこと。船砲隊長は命令を訂正「退船内」を命ぜられた。

しばらくして船底がついたのか、船体の傾斜がすこしもどった。陸地の方から漁船小船が救援に来てくれた。持てる限りの兵器携帯品を持って上陸した。上陸すると私が日直で週番肩章をかけていたので目立ったらしく、周囲に兵隊が続々集まってきた。分隊、小隊で人員掌握をさせ、夕方近くになって船砲隊は垂水の女学校に仮に収容されるようになった。

夜になって乗組船員側と船砲隊と報告のための打合せをした。総合した状況原因は転舵点に近づいていたので機雷探査の大発艇も本船を待たため本船との距離が近づいていた。そのときに機雷を発見したので機雷と本船との距離も近く、本船は微速度航行ながら潮流に乗っていたので、回頭停船共に間にあわなかった。また操舵室では赤旗の停船信号は確認したものの手旗信号は読まず我々の通報で対処したので若干の時間的ずれがあった。

打合せが終わってから、私が船砲隊を代表して広島の

船舶歩兵団司令部に報告に行くことを命ぜられた。船長は擱座した船にもどって残られるとのことだった。私は急いで夜行列車に乗り広島に向かった。

—広島原爆被災—

翌朝、列車は広島の手前の海田市でとまった。

「昨日広島が空襲をうけてこれより先は不通となり、列車の運行はここで打ち切り」とのこと。やむなく列車を降りたが、なんとなく広島へ行かねばならぬと駅前で思案にくだっていると、救援に向かう軍用トラックが通りかかったので事情を話して便乗させてもらった。

広島に近づくと一望焼け野原になっていた。テント張りの応急救護所の前でトラックを降りた。地面にしかれたむしろのうえに大勢の負傷者が寝かされていた。頭からあしきまで白布を巻かれた透明人間のような姿の人もあった。焼け野原の瓦礫のなかを比治山を目標に歩いた。あちこちにまだ死体の横たわっているのがあった。建物はすべて倒れ焼けていたが、折れて立っている電柱の尖端からちろちろと炎の見えるものもあった。

比治山に登り司令部についた。広島市街と反対斜面に

ある兵舎は無事だったが、司令部の本屋は倒れてしまっている。団長閣下は小さなテントのなかに机と椅子をおいて執務しておられた。私の報告の前に参謀がハワイ放送を傍受したところによると、広島に特殊爆弾を投下したと放送していると報告していた。

「吉備津丸」の沈没擱座の報告をすると、船体の処理に関して字品の補給廠の意見を聞いてこいとのこと。また、てくてくと歩いて字品に行った。途中、煙草専売局の建物はなくなっていたが赤煉瓦の塀が残っていた。そこに福山の原隊にいるはずの同期の者の顔がみえたので声をかけると、福山から救援に来て死体を集めて火葬しているのだとのことだった。

字品の補給廠では「吉備津丸」の浮揚には日本中の大型サルベージ船を集めても作業は六か月を要する、船体の放棄が適当とのことであった。司令部に取ってかえし報告した。

「揚陸可能な全兵器を揚陸してつぎの命令を待て」とのことであった。字品の教導隊の兵舎で宿泊させてもらった。門司港外で乗船を沈められた同期の者が部下と

共に宿泊していた。昼間は広島市内の救援活動に出ているとの話だった。当時、原爆のことはまったく知識がなかったが、投下爆発の時のようすなどいろいろ聞いた。翌朝の列車で垂水に帰って、船砲隊長、中隊長に報告したが、すでに停泊場司令部から命令連絡があり、兵器の揚陸、神戸第三突堤に集結の作業をしており、宿舎も兵庫駅前の旅館になっていた。それから毎日集結した兵器の位置に衛兵を立て、兵器の手入れにかよった。

— 敗 戦 —

八月十五日夕刻になってから終戦の詔勅の出たことを知った。我々原隊をはなれている者には対処の方法がなかった。

数日してからだだったと思う。夕食がすんでしばらくしてのことだった。アメリカの進駐軍が和歌山に上陸した。すぐ、大阪、神戸にも進駐して来るだろうとのうわさが聞こえた。直接接触しての衝突はさげねばならぬと、急ぎ原隊に帰ることになった。

ただちに宿舎の前に全員集合、船砲隊長が船砲隊の解散を宣告された。すぐ、兵庫駅のプラットホームにあ

がったが列車はまったく不定期になっており、はいって
くる列車は満員だった。部隊でまとまって乗車すること
はまったく不可能なので、できるだけの範囲でまとまり
ながら各個で乗車することになった。なんとか割り込ん
で私も姫路に停車した時、まあたらしい軍装をした兵隊
がさらに押しこんで乗ってきた。聞くと九州方面へ行く
のだとの話だ。軍隊の統制命令がまったく徹底出来なく
なっているのを感じた。

翌朝、福山につき原隊に帰ったが地方の都市は平靜
だった。連隊長に報告に行った中隊長は、連隊長から
「部隊は現任務を続行中である。貴公等は兵器を捨て
て帰ってきた。」

と大目玉を食った由。あらためて中隊長からお前は一個
分隊をいんそつして神戸にもどり、兵器の守護をしてく
れといわれた。

翌朝、下士官兵十五人とともに神戸にもどり、停泊場
司令部に出頭した。埠頭近くの倉庫のいちぐうを宿舎と
してあてがわれ、停泊場司令部の給与を受けながら毎日
火砲の手入れと監視にかよった。毎日かよう道の途中で

中国人の捕虜らしいものたちの収容されていた建物があ
り、大きな青天白日旗をかかげて男たちはうろろうして
いた。無気味で兵隊たちもいやがった。下士官にいんそ
つさせてさきにいかせて、私は皆を守護すべく実弾をこ
めた拳銃を持って後尾を歩いた。

ある日、停泊場司令部に連絡に行かせた者が途中の神
戸市内で原隊の兵隊にであつたらしい。原隊では部隊が
解散し復員が始まったと聞いていた。皆が早速補給廠に
いくと業務繁多でもそれどころではないという。ま
た、停泊場司令部に行くと下士官は原隊に帰し、貴公は
憲兵になって進駐軍に兵器を渡していけという。

数日かよって押し問答のあげく、ようやく兵器リスト
を作成して停泊司令部に渡して帰隊する了解をとりつけ
た。福山へもどる列車に乗ったときはやれやれとほっと
した。某軍曹と某上等兵がにやにやししながら航速測定機
の付属のストップウォッチを私にみせた。私がリストの
書きこみに夢中になっているまに抜き取ったらしい。ど
うせ進駐軍に渡して廃棄されるのなら私も双眼鏡のひと
つぐらひは抜いておくのだったと思つたのがあとの祭

だった。

対空戦と復員輸送記

福島県 白井哲哉

昭和十八年十二月、二年間苦案を共にした戦車とわかれをつけ、陸軍船舶隊へ機関部要員として転属した。十二月末宇品船舶司令部にいたり、四月まで船用ジーゼルエンジンの教育がつづけられた。この間、香港で捕獲した豪華船で航海訓練をかねて瀬戸内海を往復し、神戸製鋼、大阪発動機、山岡内燃機、三菱造船所において船用エンジンの実地教育がおこなわれた。

五月、中隊編成、機動輸送第十二中隊付、私の部署は機械長であった。中旬になって艇受領の命令来たり、大阪藤奈瀉造船所にいたれば、なんと海軍S B艇でタービンエンジンであった。

急遽、呉より海軍下士官による蒸気エンジンの特訓が始まる。進水より機装中の二週間で概略の教育を終わら

試運転に立ち会い、大阪から宇品まで、海軍の指導による航海で泥縄式ではあるが、一応の訓練は終わった。

以後十一月まで瀬戸内海、横浜、釜山の航海で試行錯誤を繰り返しながらなんとか航行できるようになった。航海科の連中は、三角函数や六分儀のそうさに頭を悩ませていた。

昭和十九年十二月、前線出動の命が下る、門司出港せるも颱風に遭遇、五島列島福江港に難をさく。翌日出港、颱風余波にて波高十五メートル、四屯アンカー流失、雲多くして天測不能、くわえて海流を計算にいれなかったために、予定時刻になっても予定場所にとらず、あとで判明せしところによれば予定航路よりも百六十マイルずれていた由。

それに制海権なきため、敵潜に追われること幾度か、そのたびに砂浜に接岸し難をさく。

十二月六日高雄入港、南方進出にそなえ整備。以後当時の記録が残っているので、それを抜粋する。

一月九日

再度の空襲、グラマン八機、高雄港被弾八か所、田辺